

小特集①

旅客船「セウォル号」沈没事故の余波

1. 沈没事故の経緯

4月16日、韓国南西部の珍島沖で旅客船「セウォル号」の沈没事故がおきた。仁川と済州島間を運行するセウォル号には476人の乗客乗員が乗り、そのなかには修学旅行中だった檀園高校の2年生の生徒325人と教員14人も乗っていた。セウォル号の沈没現場では、障害物のため捜索が難航し、6月時点で292人の遺体を収容したが、12人が行方不明のままである（読売6/16ほか）。

沈没の原因は船が急旋回し、荷崩れでバランスを失って横転・沈没したとされる。船は2012年日本から購入後、船体上部を増築し定員を117に増やすなど、無理な増築で重心が変わり、船体が不安定になったことが事故の遠因になったとみられている。制限以上の車両や貨物を積んでいた疑惑も浮上した。また経験の浅い三等航海士が現場海域での運航業務を初めて任されたため、何らかの判断ミスがあったとの見方もある（朝日4/23ほか）。事故合同捜査本部は、船長らを殺人罪などで逮捕・起訴し、これまで操船担当の全乗員15人が逮捕された。5月26日にはセウォル号の運行会社「清海鎮海運」の代表ら5人が業務上過失致死傷などの罪で起訴された（読売5/27ほか）。

2. 各地での追悼

4月21日、京畿道安山市にある檀園高校の校門の脇には、献花台が置かれ、門柱に在校生や卒業生、父母らが書いたメモが無数に貼られた。また学校周辺には教会などに「生きて帰ってくることを祈ります」といった横断幕が揚げられた。高校近くの体育館に設けられた合同慰霊所には生徒152人と教師4人、一般乗客3人の計159人がまつられていて、その祭壇には事故で亡くなった生徒らの顔写真が花とともに並べられ、参列者が次々と献花した。室内の壁には大型モニター2台が設置され、犠牲者の写真と名前を映し出した。安山市中心部の文化広場では、在校生、卒業生、父母ら数百人以上が集まり、ろうそくを灯して犠牲者を追悼するとともに、行方不明者の生還を祈る集会が開かれた（東京4/24ほか）。合同慰霊所には弔問の列が続き、聯合ニュースによると27日には約4万3千人が訪れ、28日朝までの弔問客は計16万人4千人を超えた（毎日4/28）。全国126ヶ所に設けられた献花会場には、約1ヶ月で182万人が足を運んだ（東京5/15）。

事故現場から捜索船が行き来する彭木港では、事故から1週間を迎えた23日、僧侶が木魚をたたく音が響き、事故発生の午前8月49分には「観音菩薩」と繰り返し唱えるなか、遺族ら3人がひざまずき、海に向かって祈る姿もあった（読売4/23）。

日本で大ヒットした曲「千の風になって」の韓国語版が各地の追悼式で流された。聯合ニュースによると、テノール歌手イム・ヒョンジュはそれを追悼曲として発売し、収益金の全額を遺族らに寄付すると表明した。韓国語版は「私の写真の前で泣かないでください」との歌い出して、事故後、各地の追悼行事やテレビでも流されている。4月下旬には韓国の複数の音楽配信サイトで1位になり、5月1日に再発売された（読売5/2ほか）。

未だ救助されていない乗客の無事を祈る「黄色いリボン運動」が広がった。犠牲者を悼む会場脇のテントとポールに、訪れた人が犠牲者への思いを書きつけた黄色いリボンを結びつけるものである。事故発生後に始まった黄色いリボン運動は「無事に帰ってきてほしい」という願いが込められている。インターネット上でも広がり、ツイッターやフェイスブックのプロフィール写真を黄色いリボンに替える人もいる。ソウル中心部の清溪広場では4月22日から、宗教団体がリボンを結ぶロープを張り、リボンと油性ペンも用意した。「必ず生きて帰ってきて」「待ってます」などと書かれたリボンは数百を超えた。珍島の港でも防波堤の柵約200mにわたって黄色いリボン数百本が結ばれた。ボランティアや韓国の報道陣も黄色いリボンをつけて活動している（朝日4/24ほか）。日本の山田監督の映画「幸福の黄色いハンカチ」では、黄色いハンカチは夫婦が感動の再開を果たした幸せの象徴だったが、韓国では悲嘆と憤怒のしるしになった（東京5/30ほか）。

5月1日から「セウォル号」事故に対応するための汎国民対策機構の必要性を感じた各界の円卓会議が開かれ、「セウォル号惨事国民対策会議」（<http://sewohlo416.org/>）が発足した。6月6日現在800余りの団体が構成されている。このサイトではセウォル号事故に関する情報はもちろん、「ろうそく地図」の項目があって全国のどこで「ろうそくの追悼集い」があるのか地図と日程、場所が詳しく掲載されている。「ネイバーサイバーセウォル号焼香所」というサイト（<http://campaign.naver.com/memory/>）もつくられ、「ごめんなさい。ごめんなさい。忘れません」という見出しがあり、ネイバーにログインして献花をすることができるページになっている。献花した人のIDが菊の花とともに流れる。

3. 事故に対する社会的反応

4月17日、韓国カトリック司教協議会の会長カン・ウイル司教（チェジュ教区）はメッセージを発表し、犠牲者と遺族に哀悼の意を表すとともに、安全性を無視した性急な生活を改めるよう呼びかけた。教皇フランシスコも4月19日、韓国の事故犠牲者のために祈るよう、世界中に呼びかけた（カトリック5/4）。

4月29日の閣議で朴槿恵大統領は、事故の予防や初動対応が不十分だったと認め、謝罪した。しかし、事故に対する政府対応を批判する抗議集会在5月に韓国各地で開かれるなど市民からは強い批判が相次いだ。聯合ニュースによると、6月29日、鄭首相政府の緊急幹部会議で、セウォル号沈没事故の犠牲者の追悼碑と追悼公園を建設する方針を表明した。「韓国の国民が4月16日（事故発生日）を永遠に忘れないよう、その日を『国民安全の日』に定め、追悼碑と追悼公園をつくる」と説明。今回の事故と犠牲者が韓国社会を変革させた意義を後世に伝える施設「国民安全記念館」の建設も進めると明らかにした（東京6/30）。

事故の行方不明者の捜索を待つ家族らを支援するため韓国全土からボランティアが駆けつけ、支援テントが立ち並ぶ「ボランティア村」が出現した。沈没現場に近い港には、家族待機用テントの横に支援団体が設置したテントが海沿いに約2km続いている。家族らが寝泊りする体育館周辺にも各地の市民団体や赤十字、病院、企業、宗教団体などが設置した銀行やカウンセラー、礼拝所などのテントが集まった（東京中日スポーツ4/27）。

一方、船中に閉じ込められていると偽情報を流すなど、行方不明者を装ったメッセージの書

き込み、ニュースサイトなどを偽装したフィッシング詐欺などが起きて、問題化した。16日夜、行方不明者を装った救助を求める複数の書き込みがソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) を通じて拡散し、警察は少なくとも18人を摘発した。半数近くが10代だったという。IT大国を自任する韓国で「急速な技術の進歩に利用者のモラルが追い付いていない」と専門家は指摘する (毎日 4/27)。

4. 「セウォル号」オーナーを巡る問題

仁川地検は5月16日、セウォル号の運行会社「清海鎮海運」の実質オーナーの兪炳彦^{ユビョンオン}氏の逮捕状を請求した。地検によると、事故後に清海鎮海運と関係者を捜査した結果、同社の利益が兪氏とその家族らに流れていることが判明。そのために同社の財務状況が悪化し、セウォル号の安全に必要な投資が適切に行われなかった可能性もあるとみて、横領や背任、脱税の疑いで調査をすすめた。22日には逮捕状を取り、懸賞金もかけて全国指名手配した。検察は兪氏が会長として海運の経営を取り仕切っていたとみて、一族の財産を没収し、事故被害者家族への賠償に充てる方針 (読売 5/23 ほか)。

兪氏は、韓国キリスト主流派からは異端とみなされている新興宗教団体「キリスト教福音浸礼会 (救済派)^{クウォンパ}」を率いていて、5月21日に仁川地検は兪氏が身を隠しているとみられる京畿道安城市にある教団施設に強制捜査に入った。宗教団体の施設の前では信者らが座り込みを続けていたが、捜査に協力する方針を表明、検察当局の車両や捜査員が施設内に入ったが所在はつかめなかった (朝日 5/22 ほか)。韓国の複数のメディアは、兪氏が5月末、海外へ政治亡命するためある国の在韓大使館に打診していたが、拒否されていたことを報じた。聯合ニュースによると、宗教団体の実質的教祖とされる兪氏側が「宗教的迫害」を理由に難民申請を試みようとしたが、大使館は「単純な刑事犯」との理由で却下したという (東京 6/4)。

兪氏は1962年に義父権信燦^{クワンシンチャン}と「キリスト教福音浸礼会」を創設し、70年代から信者の献金と労働を活用して船会社などを始めた。87年には教団関係者の経営する会社である五大洋が信者から資金をかき集めて倒産し、社屋内から32人の死体が発見される事件があり、関与を疑われたこともあった。91年には、信者からの資金搾取で懲役4年の実刑判決を受けて服役した。会社は97年に破産したが、兪氏は信者から集めた資金で別会社を作り、破産会社から事業を買い取って事業を続けていた。兪氏一族は多数の不動産を所有、資産価値は2,400億ウォン (約238億円) と見られる (毎日 5/18 ほか)。

韓国キリスト教異端相談所協議会の陳用植^{チンヨンシク}会長は、清海鎮海運の社員のほとんどは「救済派」の信者で、救済派は律法廃棄論で放縦主義であり、罪を犯しても悔い改める必要はないという教えで、「道徳性を抹殺してしまうような教理なので、事業にも問題が起こる」とみている (クリスチャン 5/4 ほか)。

なお、キリスト教福音浸礼会は、1960年代韓国慶尚南道大邱市で宣教活動したアメリカ宣教師に教理を学んだ権信燦により創設されたものだが、娘婿の兪氏が教会の資金で事業をすることを巡り、教団内で分派が生じた。李福七^{イボクチル} (イ・ヨハン) は「大韓イエス教浸礼会」 (「生命のお言葉宣教会」=李福七派)^{パクオクス}という教団名で1982年に分派し、独自路線を歩んだ。同一宣教師から教理を学んだ朴玉洙は1976年大邱市で「喜びのニュース宣教会」 (朴

玉洙派) を設立した。登録教団名は「大韓イエス教浸礼会」だが、「喜びのニュース宣教会」として活動している。このように「キリスト教福音浸礼会」は3教団に分裂している。信者2万人を擁するのが兪氏の一派で、「喜びのニュース宣教会」は韓国で5万人と3教団の中では最大の信者数を誇っている (FLASH5/27 ほか)。

[文責：李和珍]